

一人称と家族呼称

—日本語の人称代名詞の現在を日本語教育実践へ取り入れる—

平 松 希 望

1 はじめに

大学生活を送っている中で卒業論文のテーマを考える日まで残しておいた新聞記事がある。それが本稿のきっかけである。本研究に取り組むきっかけとなった記事は、2009年7月1日の『朝日新聞』に掲載された国立国語研究所の調査で、祖父を「じいじ」「ばあば」と呼ぶ大人が4人に1人いることが分かったという記事である。この記事から、日本人は何故いろいろな人称代名詞の中から自分が使用する人称代名詞を選択し、使用するのだろうかという疑問を持ち人称代名詞について調査していきたいと考えた。

人称代名詞と一言に言っても、大きく分けて一人称・二人称・三人称と3つある。どれも興味を持つものであるが、本稿は日本語教育を通して日本語を学んでいる生徒と会話や学習をしている中で特に気になっていた一人称と家族呼称について調べ、日本語教育の実践にいかにかかすかを考えたい。

2 先行研究と本研究の位置づけ

先行研究は主に一人称・家族呼称はどのようにして使い分けされているのかの観点が多い。三島（2003）は学級内での児童の呼ばれ方とその児童同士の関係を述べており、呉・吉見（2003）は夫婦間の呼び方について述べている。また津留（1956）は家族間の呼び方から家族関係が分かると家族呼称を見ていたり、荒木（2003）は日本語の人称代名詞がどのようにして使用されているのか見ている。つまりこれらの研究では主に一人称・家族呼称の使用法を中心に見ていることが分かる。

そこで筆者は上記の先行研究で行っている使用方法だけではなく、使用している一人称や家族呼称に対しどのようなイメージを日本人は抱いているのかというイメージも同時に考察を深める研究をしたいと考えた。イメージ研究も合わせることで、日本語学習者が一人称と家族呼称を使用する際に、どのような人称詞を選択すれば良いのか自ら考

えて使用することを可能にするために、教科書の記述や授業実践に生かすことができる研究になるのではないかと考えたためである。

そこで、本稿はまず現在の20代の日本人学生が実際に使用している一人称と家族呼称を様々な状況を用意して調査する。また同時に現在の20代の日本人が使用している頻度の高い一人称と家族呼称についてどのようなイメージを抱いているのか調査する。そして、以上の実際の使用方法とイメージ結果を合わせ、その結果をいかに日本語教育に生かしていくかについて提言を行いたい。

3 予備調査

3.1 一人称について

人称代名詞を『広辞苑 第五版』で調べると、「代名詞のうち、事物・場所・方向を指示する指示代名詞に対し、人を指示するもの「私」「あなた」「彼」など」とある。

次に上記でも出ていた「私」「あなた」「彼」を一人称・二人称・三人称の代表と考え、一人称・二人称・三人称について『広辞苑 第五版』で調べてみる。

一人称：「自分または自分を含む仲間を指示する人称。「われ」「わたし」「われわれ」の類。自称。」

二人称：「対話する相手、または相手を含む仲間を指示する人称。「きみ」「あなたがた」の類。対称。」

三人称：「話し手・聞き手以外の第三者を指示する人称。「彼」「それ」の類。他称。」

上記の3つの人称代名詞中で、小嶋（2008）は「話し相手によっても、使用される自称詞には、性差や学年に伴う相違と所属集団独自の使用形態が存在することが確認された」と述べている。また、王（2010）が「日本語母語場面においては、対称詞は話者の心的態度を表現する機能の違いによって使い分けられる事が考えられる。」と述べており、蘇（1982）も「相手の年齢、性別、職業、身分などによって違う訳し方を選ばなければならない」と説いている。

さらに金水（2000）は「私的な話し言葉」において性差を最もよく表すのは第一人称人稱詞、一中略一などである。」とし「男性語」については「「男性語」の一人称は「ぼく・おれ・わたし（わたくし）・（わし）」である。「ぼく・おれ」は特に「私的」性を強く担っている。「わたし（わたくし）」は「公的」な人稱詞である。一中略一また「ぼく」は「飼いならされた」男、「おれ」は「野生の」男を演出する。現代の若い男性は、年齢、場面などで「ぼく」「おれ」「わたし」を使い分ける傾向にある」と説き、女性語については「「女性語」の一人称は「わたし」「あたし」である。「わたし」は公的、「あたし」

は私的という性格を持つが、その差はあまり大きくない。」と説いている。つまり、一人称は日本人の文化が大きく反映しており、また性差が大きく出てくるということが分かる。

以上から、一人称は日本語学習者にとっても、いかに自己規定し他者に示してみせるかは重要な課題であり、日本語教育実践の中でもきちんと教えていきたいところだと考える。

一人称で主に使用されているものは何かを知るために、ゼミ生12名にアンケートを取り、以下を本アンケート調査の調査項目に選定した。

私(わたし)：「話し手自身を指す語。「わたくし」よりくだけた言い方。」(『広辞苑』)

私(わたくし)：「話して自身を指す語。現代語としては、目上の人に対して、また改まった物言いをするのに使う。」(『広辞苑』)

うち：「自分。わたし。関西方言で、多くの女性や子どもが使う。」(『広辞苑』)

あたし：「一人称のくだけた言い方で、主に女性が用いる語。」(『広辞苑』)

僕：「漢文の中では、古代から男子の、非常にへりくだった表現として見られるが、訓読されるのが一般的であった。奈良時代の訓は不明だが、平安以後は「やつがれ」が普通。江戸時代の漢文から、「ぼく」の形で、対等もしくは目下の者に対する自称の代名詞として青年・書生などが使った。一中略—現代では、年齢に関わらず用いられるが、特に少年男子の自称として広く用いられる。また、子どもが自分を指して言うのを利用して、大人がその子に呼びかけるのに用いられることもある。」(長崎、2007)

俺：「男女共に、また目上にも目下にも用いたが、現代では主として男が同輩以下の者に対して用いる、荒っぽいいい方。」(『広辞苑』)

みー：英語で私の意味。

自分：「おのれ。自身。自己」と広辞苑に書いてあるが人称代名詞ではない。

自分の名前

○○ちゃん・○○くん

あだ名：(アダは他・異の意味) その人の特徴などによって実名のほかにつけた名。
(『広辞苑』)

3.2 家族呼称について

家族呼称は、津留（1956）が述べているように「家族という集団はその構成において、またその意義や運営において広く似たような小集団であり、その生活的、全面的、長期間的な接触の故に、その呼び合い方はそれなりの心理的真實性を表していると思われる」ものである。また吉見（2003）も述べているように「親族における呼び方の問題は人類の社会的属性や人間関係の価値観を反映し、その社会の文化、政治的背景、伝統、習慣と密接な関わりを持っている。」ため、様々な文化背景を持つ学習者がいる日本語教育でどのように教えていくのがよいのか考えていきたい。

家族呼称について様々な先行研究を調べていくうちに日本の家族呼称の使用において、ある一定の決まりが主に2つあることに気づいた。

まず、鈴木（1973）の分析である。

家族内での会話に於て、第一に注意すべきことは、目下の者は目上の者に向かって、人称代名詞を全く使わないという事実である。子供は父母に対して、いかなる場合にも人称代名詞は使えない。「あなた」は、尊敬を含むが故に、目上に対して使うとされることがあるが、子供が親に向かって、「あなた」とは言えない。一中略一弟や妹も、兄や姉に対して人称代名詞をまず使わない。

このような対人関係では、目下は目上に、父、母、兄、姉、といった親族概念を含む各種の呼びかけ語を使用するのがふつうである。一中略一それでは目上の者が目下に話しかける際はどうか。面白いことに、今度は一切の親族用語が使えないのである。弟、妹、娘、息子、子、孫、そして甥、姪といった、言葉を使うものから見て、下の地位を表わす言葉及びその変形は、相手に対する呼びかけ語にはならない。一中略一目下の者に呼びかけるには、相手の名前（さん、君、ちゃんなどをつけることも含む）を使うか、「お前」を使うのが普通である。

また、荒木（2003）は「目上の人（親族間で年齢が上の人）には、親族呼称で呼ぶのが普通である。自分より年齢が下の人物に対しては、「あなた」とか「きみ」「おまえ」といった人称代名詞を用いた呼び方が可能であるが、「弟」「妹」「甥」「姪」など親族呼称を使って呼ぶことはできないのである。日本語では目上の人やあまり親しくない人物には、あえて人称代名詞の使用を避けている傾向にあるといえる。」と説明している。さらに、佐藤（2007）も「日本の家庭では家族が自分や相手と呼ぶ場合、年下の者は年上の人に向かって人称代名詞を使わず、その反対に、年上の人年下の者に話しかける際には親族用語を用いないという原則がある。」と述べている。つまり日本語での家族呼称は主に目下から目上に使用されていることが分かる。

更に日本語の家族呼称においても一つ決まりがある。

鈴木 (1973:357) は、「話者が相手をさして使う親族語が、必ずしも話者と相手との人間関係を正しく反映していないものが少なくない」—中略—家族内で対話をするとき、目上の者は、相手と自分の関係を、自分の立場から見ないで、子供の立場、それも一番年少の子供の立場を通して把握するのである。—中略—このような表現の仕方が日本人の自己規定の構造と深く結びついていることを指摘している。」とし、さらに鈴木 (1968) では「日本の家庭で、家族が相手呼んだり自分のことを言ったりする場合の基準は、「最年少者」とどのような関係にあるか」ということである。さらにこうした呼び方は、家庭内だけでなく、家族外でも用いられることがある。」としている。

日本人の自己規定の仕方は、見方によっては主体性のなさという批判を受けるかもしれないが、佐藤 (2007) が「最年少者を基準にして相手に呼びかけたり自分を表現したりすることによって自己の立場を自覚すると共に、その自覚に基づいた行動をすることが、年少者 (弱者) に対する思いやりの気持ちを育てることにつながっていたと考えられる。」と述べている。つまり家族呼称とは自分の役割を再確認させ、手助けしてくれる大切な役割を担っていると考える。

しかしそんな大切な役割を担っている家族呼称も近年減少しているように思える。

その原因としては「家族崩壊」や核家族化や少子化・共働きといった家族の形態や生活スタイルの変化が家族内における親子・兄弟姉妹関係に影響を及ぼしているのではないだろうか。」(鈴木、年?) や、「いずれにしても、社会を構成する最小単位であり子どもにとっては最初に密接に関係する人間関係ともいべき家族の中で「一番年少者」、いいかえるなら「最も弱い者」を基準とした呼び方を日常的に用いられることで養われるであろう兄や姉としての自覚や振る舞い方を身につける場が少なくなっているのではないだろうか。—中略—家族内にとどまらず社会の中で自分の立場を意識することを低下させることにつながっているように思われる。」(佐藤、2007) という説明がある。

3.3 現在の日本語教科書の記述の現状

以上の日本語使用状況が日本語教科書の中でどのように記述されているかを見るために、『みんなの日本語 初級』を中心に日本語教材を見てみたところ、一人称は、初級教材で使用されているのは「わたし」のみで、自然な会話に見えず気になった。また家族呼称については、例えば親の場合、「お父さん」「父」「父さん」と様々な呼び方をしているが、この使い分けについての説明がない。

つまり全体的に一人称・家族呼称に対し一つ一つを説明しておらず、どのような場面

で使っても無難な一人称を教えており、家族呼称においては単語として様々なものを提供しているように思えた。

筆者の日本語教育実習の経験を考え合わせても、日本人とのより密なコミュニケーションを行うためには、日本語学習者にもっと自分を表現するための選択材料としての説明を与えたり、分析材料として相手との関係を表す家族呼称についてのより詳細な説明を与えることが必要なのではないかと考えた。

4 本調査について

4.1 調査概要

調査概要は以下の通りである。

調査目的 19歳から24歳の日本人男女に現在の一人称と家族呼称についての使用方法とイメージ調査を行う。

調査方法 選択・記述式アンケート

調査項目 (1) 家族構成や言語使用意識についてのパーソナル情報調査 (11問)
 (2) 使用実態調査 (6問)：一人称と家族呼称について実際の使用実態を知るため場面設定を行った。
 (3) イメージ調査 (22問)：それぞれの呼称に対するイメージを知るための設問。調査においての人称詞・選択肢等は前述の予備調査の結果をもとにした。

調査対象 フェリス女学院大学の19歳から24歳女子学生 81名
 他大学19歳から24歳男子学生 20名

調査時期 2010年7月から10月頃

5 調査結果

5.1 一人称について

5.1.1 男性の一人称

まず実際使用している一人称の調査を行ったところ、大学生の男性がよく使用している一人称は、「俺」「わたし」「わたくし」「僕」の4点で、その中でも「俺」が最もよく使用されていることが分かった。使い分けとしては、公的な場では「わたし・わたくし」を使用し、公的な場でない限り「俺」を使用していることが分かった。

「俺」「わたし」「わたくし」「僕」に対して、男性がどのようなイメージを持っているかをイメージ調査(調査3-問3)の結果から見てみると、「俺」に対し、男性は「何

とも思わない」が80%と結果が出ている。この結果はよく使用しているからこそその結果だと思う。また、これに次いで「カッコいい」「男らしい」「親近感がある」とも回答がある。「俺」という語にこのような印象を持っていると同時に、自分自身も使用するという事実には、自分を男として良い印象で見せたいという気持ちが表れていると思う。

一方、女性が、男性の一人称についてどのようなイメージを持っているかを見てみると、「俺」については「男らしい」が66%と回答しており、やはり女性から見ても「俺」という一人称が支持されているように思う。これに次いで「大人っぽい」「カッコいい」との回答がづくが、このような印象は男性からすれば、女性に抱いてほしいイメージだと考えられる。したがって、「俺」については、肯定的な印象を持つ女性が多いことも、多くの男性が「俺」を使用する背景にあると考えられる。

しかし女性の中には「くだけている」「下品」「ふざけている」とマイナスイメージも6%出た。この結果は、男性の使用に対してなのか女性が使用するのに対してなのか不明である。

次に「僕」を見る。「僕」に対するイメージ（調査3-問3）は、男女共に「子供っぽい」という回答が一番多く出ている。また、一人称の使用がある時期から変わったかについてのパーソナル調査（調査1-問5（2））では、40%の男性のうちの100%がパーソナル調査問5（3）で「僕」から変わったと出しており、その理由として「周囲の友人が使っていたから」というような周囲の影響をうけての使用変化が出ている。

また実際に変わった時期も小学校高学年が62%と一番多い。次いでの前後のということからもこの時期に集中していることが分かる（調査1-問5）。

この結果から、世間一般的に「僕」には幼少のイメージがあることが分かる。

また、「わたし」に対するイメージを見てみると、女性は普段使用している人が多いため「何とも思わない」が多いのに対し、男性は「しっかりしている」「大人っぽい」が多く、ここからも公的な場での使用が多い理由が分かる。同様に、「わたくし」のイメージは、男女共に「かしくまっている」が多く、「わたし」と同様に公的場所での使用が多くなる理由であることが分かる。

この結果から女性より男性の方が一人称の種類が少なく、4つの一人称の使用には、自分が周囲からどのような印象を受けたいと考えているかが強く出ていることが分かる。

5.1.2 女性の一人称

女性は公的な場では意識して「わたし」を使用しているが、その他では「わたし・あたし」が多く使用していることが分かった（調査2）。

しかし、筆者は「わたし」と使用している意識があるが、実際よく考えてみると「あたし」と使用しているという事実から、この2点に関してはそんなに違いはないと考えている。

女性は「何とも思わない」と両者に対する印象は変わらなかったが、男性が持つイメージは「わたし」に対しては「しっかりしている」「大人っぽい」が多いのに対し、「あたし」に対しては「女らしい」が一番多かった。このことから女性の立場ではあまり変わらないこの2種類の一人称は、男性の立場で見ると大きな差があると考えられる。

しかし女性の中にも一人称調査（調査2）の問1から問4まで多少差が出ていることが分かった。

一人称では妹を相手にしたとき自分のことを何というかという設定で回答を求めたところ（問1）、「わたし」29%、「あたし」27%、「自分の名前」17%、「お姉ちゃん」9%、「うち」8%、「〇〇ちゃん」6%、「あだ名」3%となっている。また、同性の友人を相手にしたとき自分のことを何というかという設定で回答を求めたところ（問2）、「わたし」38%、「あたし」37%、「うち」13%、「自分の名前」8%、「〇〇ちゃん」「僕」「あたし」1%となっている。一方、恋人を相手にしたとき自分のことを何というかという設定で回答を求めたところ（問3）、「わたし」37%、「あたし」35%、「自分の名前」12%、「うち」9%、「あだ名」4%、「〇〇ちゃん」3%となっている。そして、面接官を相手にしたとき自分のことを何というかで回答を求めたところ（問4）、「わたし」69%、「わたくし」28%となっている。

以上の一人称使用実態の調査結果をふまえて、前述で述べた「わたし」「あたし」以外の主にパーセンテージの多く出てきている「うち」「あだ名」「〇〇ちゃん」「自分の名前」をイメージを見ていく（調査3）。

「うち」に対しては、44%/50%と男女共に「くだけている」「子供っぽい」が大半を占めている（調査3-問3（3））。しかし女性の中では「何とも思わない」と「個性的」が同位の13%を占め、感じ方は人によって全く異なっている。

またパーソナル調査（調査1）の結果を見てみると、成長のある時期に使用する一人称が変わったと答えた75%のうち、28%の人が「うち」を使用していた。

使用が変化した時期についての回答から考えてみると、小学校高学年（24%）と小学校卒業時（18%）と回答の多い時期は、一人称の「うち」を使用することが流行していたことを思い出した。なぜ流行していたかは定かではないが私の周りでは確実に流行しており、筆者も使用していた。

このことから「うち」は流行からの発生であり、「子供っぽい」「何とも思わない」と

いう回答が出ているのは自分自身が幼いころによく耳にしていたからかもしれない。

「あたし」に対し、女性は「何とも思わない」が31%と一番多かった。しかし「くだけている」25%、「子供っぽい」17%とマイナスイメージの結果が次いで出ている。男性が「あたし」に対して持つイメージは「女らしい」(45%)「何とも思わない」(25%)が続いているが、やはり一方で「下品」(10%)「くだけている」(10%)というマイナスイメージも出ている。

「自分のあだ名」の使用については(調査3-問3)、「子供っぽい」という回答が男性30%、女性36%とともに一番多くを占めている。また男女共に次いで「ふざけている」(男性25%、女性15%)「個性的」(男性15%、女性15%)「ぶりっこ」(男性15%、女性12%)とマイナスイメージが多く、「あだ名」に対しあまり良いイメージを抱かないことが分かった。しかし実は、調査2の一人称使用調査では使用率が多かったので、イメージ調査の結果をみると使用実態とイメージがあわず、気になるところである。

「○○ちゃん」の使用に対するイメージ(調査3-問3)は、男性の35%、女性の51%が「子供っぽい」と回答した。女性は「ぶりっ子」(28%)男性は「ぶりっ子」(25%)「ふざけている」(20%)とつづき、「○○ちゃん」に対してのイメージもマイナスが多い。使用実態調査では、家族を相手にすると使用する女性が多かったが使用しない方が良いのではないかと感じた。

「自分の名前」の使用に対するイメージ(調査3-問5)では男女共に「子供っぽい」(男性30%、女性64%)「ぶりっこ」(男性45%、女性19%)が多くを占めていた。パーソナル調査(調査1-問5)で一人称が変わったと答えた60%のうち、一番多い30%の人が以前「自分の名前」を使用していた。使用変化とイメージが一致している。

また女性は4%「かわいい」と答えがあったが、男性にはそのような回答はなく男女差を感じた。

以上のことから女性の一人称は使用目的と実際に抱いているイメージに大きな差があるように感じた。また女性は相手や状況によって一人称を変えて自分の見せ方を変えようとしているということが分かる。

5.2 家族呼称について

5.2.1 親に対して

親に対し女性は家族呼称使用調査問1から「お父さん・お母さん」(58%)「パパ・ママ」(28%)でこの2つがほとんどを占めていることが分かる。

男性は「父さん・母さん」が45%と一番多く、次いで「お父さん・お母さん」(25%)

「おやじ・おふくろ」(20%)「おとん・おかん」(10%)と順にばらばらな回答が出た。

上記で出た家族呼称のイメージを調査3の結果から見ていく。

「お父さん・お母さん」の使用に対するイメージ「何とも思わない」という結果が男性60%、女性52%と半数以上を占めていた。これに次ぐ回答としては、女性では「親近感がある」(16%)「しっかりしている」(13%)があり、男性では「子供っぽい」(15%)「まじめ」(10%)という回答が出ている。使用度が高い女性にとってはプラスのイメージが大きかったが男性の中では「子供っぽい」というイメージが背景にあって使用度が伸びないことが考えられる。

「父さん・母さん」の使用に対するイメージ(問2(2))で、男性の中では普段使用度が高いからか「何とも思わない」が35%と一番多く、「親近感がある」(30%)が次いで多く、続いて「まじめ」(10%)「くだけている」(10%)「かっこいい」(10%)「男らしい」(5%)という回答が出て他の回答は出ていなかった。これらは男性が周囲に抱かれないイメージの一つなのではないかと想像できる。

一方、女性が「父さん・母さん」に対して抱くイメージは、「男らしい」という回答が36%と一番で「何とも思わない」(18%)「親近感がある」(5%)と次いで多かったが他は様々な回答が出ていた。この呼称は女性の使用はあまり見られず、女性が男性が主に使用する呼称だと認識しているようなので、男性を見る見方として様々な回答が出たのかもしれないと考えた。

「おやじ・おふくろ」の使用に対するイメージは、男性は「大人っぽい」(30%)「親近感がある」(20%)という回答が多い。実際の使用度も高く上記の「父さん・母さん」でも述べたように見せたい自分が回答に出ていると感じた。また上記「父さん・母さん」で述べたのと同じように男性が多く使用して女性の使用が低いいためか、女性が「おやじ・おふくろ」という呼称に対するイメージは「男らしい」という結果が62%と半数以上を占めている。しかし一方で「下品」(10%)「くだけている」(10%)と「父さん・母さん」とは異なり、マイナス気味のイメージも抱いていることが分かる。

「パパ・ママ」の使用に対するイメージは、「子供っぽい」という回答が男性は70%、女性は67%と大半を占めていた。他にも少数ではあるが女性は「かわいい」(4%)「親近感がある」(9%)という回答が出ているのに対し、男性は「ぶりっこ」(5%)「ふざけている」(5%)などのマイナスイメージも出ている。この結果は女性はこの呼称の使用頻度が高く(家族呼称使用調査問1)、親に対し子供っぽく見せたいのであることが窺えるのに対し、男性は「パパ・ママ」の使用が0%である。したがって男性がこの呼称に対して抱くイメージは、女性が使用するのを見たときに持つイメージなのでは

ないだろうか。

「おとん・おかん」の使用に対するイメージは、「方言」が男性25%、女性42%と最も多かったが、男性は「くだけている」という回答が多かった(30%)。これは、使用実態調査に出ているように、男性は「おとん・おかん」と実際に使用している人が10%もいるのに対し女性は0%だということが背景にあるかもしれない。またパーソナル調査(調査1-問4)でも方言で使用されている愛知や九州地方の人が男性は25%と多いことから「方言」といった認識が多少女性より薄いのではないかと考える。

5.2.2 祖父母に対して

家族呼称使用調査問2では、「おじいちゃん・おばあちゃん」が男性85%、女性74%と大半を占め、本稿の冒頭で紹介した新聞記事とは異なる結果となった。この呼称に対するイメージ(調査3-問1)では「親近感がある」が男性40%、女性57%と祖父母との関係を意識しているような結果となった。また、「かわいい」や男性からは「女らしい」という回答が15%出ていることからより女性が使うと考えられている家族呼称なのではないかと考えた。

さらに、本稿のきっかけであった新聞記事に書いてあった「じいじ・ばあば」について見てみると、女性は8%、男性は5%と出ている。この呼称に対するイメージ(調査3-問1)では「子供っぽい」という回答が男性70%、女性60%と大半を占めており、大学生男女には幼く感じられるようで、使用が低いことが分かった。

6 まとめ

6.1 日本語教育における教え方について

以上の結果から一人称においても家族呼称においても、使用において男女差が出ているので、日本語教育で教えていく際は、男女間で差があることを説明した上で、一人称・家族呼称について教えていくほうが良いのではないかと考える。

特に一人称においては、男女共に自分をどう見せたいか、相手にどう思われたいかで日本人大学生は一人称の使用を変えていることが分かったので、日本人が各呼称に対して抱くイメージを今回のような調査結果を紹介しながら、説明することも一案だと思う。今回の調査では、男女でのイメージの違いが多少あるため、説明の際には、上記で述べてきた男女間での感じ方の違いを踏まえた上で説明をし、使用をすすめていきたいと考える。

また女性は主に「わたし」「あたし」を使用して会話をすれば間違いのないことと、男

性は私的場では「おれ」公的場では「わたし」と使用すれば間違いないことが明らかになった。

家族呼称においては、相手との関係性や地域的なものが大きく関わっているのではないかと調査結果で考えた。

6.2 今後の展望・課題

本稿では現代の大学生による一人称と家族呼称について使用方法とイメージ調査を総合して日本語教育に生かす方策を考えた。

本研究をまとめる中で今後の課題とするべきものが4点ある。

一つ目は、本稿ではイメージ調査を行う際男女の設定を設けなかったため男女どちらが使っている上でのイメージなのか統一がされていなかったことという反省がある。男女それぞれの使用に対してイメージが異なる可能性があるので、今後は男女のイメージを設定し調査を行いたい。二つ目は、自分自身がどのような意思をもって一人称、又は家族呼称を使用しているかの調査が足りなかったことである。次回は、調査協力者自身がどのような意図でその呼称を使用しているかをも同時に調査し、自分自身の意思とイメージの差を検証していきたいと思った。

三つ目に、時代背景についてである。言葉には大きく時代が反映されており、人称代名詞も時代によって流行したものなどあったように思ったので、今後は人称代名詞の時代の変化まで調べて、さらに議論を深めたい。四つ目に、男性の調査結果が少なかったことだ。

男性の調査結果が女性の役4分の1の数に留まってしまい男女のバランスが取れていなかったと感じた。女子大では男性の調査を行うのは多少困難であるが男女同数になるように実施したい。

今後の展望としては、本稿で足りなかったと感じた上記3点の調査も同時に行い本稿で行った2010年の記録だけではなく常に時代にあった結果を集めていくことがある。この調査により日本語学習者に現代の日本語の一人称と家族呼称の使用実態をイメージと一緒に提供が出来、日本語学習者が自信を持って使用出来、スムーズなコミュニケーションを図れると思うからだ。日本語学習者が増えていく中、日本語教育者が本稿のように細かく日本語の実態を記述し、その情報を提供することで、日本語学習者の方々がよりコミュニケーションがとれ、自己表現がより豊かになることを期待したい。

参考文献一覧

- 荒木達郎 (2003) 「日本語における人称代名詞の用法—自分の親を「あなた」と呼ぶことのできるのか?—」『L & C : journal, comparative studies of language and culture』創刊号, pp. 175-186
- 井東廉介 (1991) 「C. Fillmoreの格文法—日本語「格」との文法論的関連—」『石川県農業短期大学研究報告21』 pp. 45-55.
- 井之川和稔 (2004) 「人名呼称方法 (名前の呼び方) の調査と分析」『L & C : journal, comparative studies of language and culture』2, pp. 221-226.
- 王冰菁 (2010) 「会話における対称詞の言語管理—日本語母語話者と中国語母語話者の母語場面と接触場面の比較」『接触場面の言語管理研究vol. 8-1, 千葉大学大学院人文社会科学部プロジェクト報告書』
- 大和田智文・下斗米淳 (2006) 「若者における一人称への意味づけに関する検討2・4」『日本語教育における一人称主語の取り扱いについて』
- 河上誓作教授退官記念論文集刊行会 (2004) 『言葉のからくり』 英宝社
- 金水敏 (2000) 「役割語探求の提案」『国語史の視点、国語論究』第8集, pp. 311-351.
- 小嶋玲子 (2008) 「中学生における自称詞 (自分を示す人称代名詞) の使用2—話し相手による自称詞使用の相違—」『日本教育心理学会総会発表論文集 (49)』 p. 434
- 呉輝・吉見孝夫 (2003a) 「日本における妻から夫への呼び方—札幌市でのアンケート調査を通して—」『北海道教育大学紀要 (人文科学・社会科学編) 第54巻第1号』
- 呉輝・吉見孝夫 (2003b) 「日本における夫から妻への呼び方—札幌市でのアンケート調査を通して—」『北海道教育大学紀要 (人文科学・社会科学編) 第54巻第1号』
- 佐藤達全 (2007) 「家族の呼び方と子ども親について—「いじめ」や虐待の問題を考える手がかりとして—」『育英短期大学研究紀要 第24号』
- 鈴木孝雄 (1973) 『ことばと文化』 岩波書店
- 鈴木孝雄 (1995) 『ことばと文化』 新潮社
- 鈴木孝雄 (1999) 『ことばと文化 私の言語学 鈴木孝雄著作集1』 岩波書店
- 高橋圭子 (2005) 「対照詞研究のダイナミズム—一步ライトネスおよび指標性の観点から—」『言語情報科学 3号』 pp. 129-143
- 津留宏 (1956) 「家族呼称からみた家族関係」『? ? ?』
- 東京サザエさん学会 (1995) 『磯野家の謎 おかわり』 集英社文庫
- 董夢 (2004) 「家族の呼称から見る日本語と日本文化」『2004年度卒業プロジェクト成果報告要旨』
- 長崎靖子 (2007) 「人称代名詞「僕」「君」の変換」『川村学院女子大学研究紀要 第18巻 第3号』 pp. 131-147
- 中村順一・大庭美香・甲斐郷子・吉田将 (1992) 「日本語文生成における待遇表現の取り扱いについて」『情報処理学会第44回 (平成4年前期) 全国大会』
- 新村出 (1998) 『広辞苑第5版』 岩波書店
- 西川由紀子 (1996) 「子どもの使用する一人称への変化」『日本教育心理学会総会発表論文集 (38)』

p. 147 日本教育心理学会

野坂昭如 (1988) 『人称代名詞』 講談社

ホアン・アイン・ティー (2002) 「人称代名詞の用法を手がかりとした日越文化比較研究」『神田外語
大学日本研究所紀要』3, 96_a~75_a,

三島浩路 (2003) 「学級内における児童の呼ばれ方と児童相互の関係に関する研究」『教育心理学研究
51 (2)』日本教育心理学会, pp. 121-129.

三輪正 (2005) 『一人称二人称と対話』 人文書院

李長波 (2002) 『日本語指示体系の歴史』 京都大学学術出版会

渡辺友左 (1963) 「家族の呼び方」『軍語生活』 筑摩書房

『みんなの日本語 初級』スリーエーネットワーク (1998/03)

(2010年 卒業)